

令和4年度保健消防委員会行政視察報告書

保健消防委員長 三須 和夫

【視察日程】 令和4年11月16日（水）～11月18日（金）

【視察委員】 委員長 三須 和夫
副委員長 渡辺 忍
委員 鷺見 隆仁 森山 和博 山田 京子
椀澤 洋平 植草 毅 段木 和彦
近藤千鶴子 茂手木直忠

【視察地及び調査事項】

- 1 横浜市（11月16日）
 - （1）消防防災ヘリコプターについて
 - （2）高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施について

- 2 岡山市（11月17日）
 - （1）おかやまケンコー大作戦について
 - （2）総合特区について（高齢者活躍推進事業）

- 3 豊中市（11月17日）
 - （1）ひきこもり支援について

- 4 京都府（11月18日）
 - （1）京都自立就労サポートセンターについて

【視察報告】

1 横浜市

(1) 消防防災ヘリコプターについて

調査目的	<p>横浜市では、消防防災ヘリコプターを2機保有し、神奈川県から補助を受けている。</p> <p>県下の大規模災害等に対応するため、広域応援に必要とされる消防防災ヘリコプター等の維持管理・運営に係る経費の県補助金について調査し、本市施策の参考とする。</p>
視察概要	<p>1 調査項目「消防防災ヘリコプターについて」</p> <ul style="list-style-type: none">・横浜市消防局航空消防隊について・運営費（維持管理）について・県からの維持管理経費補助に至った経緯について・市議会との関係について・更新機との関係について・補助金年間7,000万円の考え方、今後の増額要望の協議等について <p>2 説明者</p> <p>横浜市消防局横浜ヘリポート航空科長、同局横浜ヘリポート課長補佐、同局総務部総務課経理係長</p>  <p>3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□令和2年と令和3年にかけて県補助金が3,000万円から7,000万円と増額に至った経緯と応分負担の継続要望については、3億5,000万円の中で県の出動割合は30%だから1億数千万円を本来負担いただきたいという趣旨で県に要望しているのか。</p> <p>■以前から県議会のみなと会というところを通じて、補助金の増額要望</p>

等をしており、今までは維持管理経費のみだったが、ダブルパイロット制だとか教育経費についても補助が必要と要望をしたところ、そこは大事であると3,000万から7,000万円になった。やはり、2億円3億円かかっている中で補助が3,000万円っていうのは少なすぎるということも併せて伝えて増額されたという経緯がある。今後も、30%ぐらいは県域の活動をしているので、川崎市でも同じような%なので、川崎市と共同して要望を続けていくという状況である。

□今年を整備費が今年3,300万円増で、補助金が7,000万円というのは少なすぎるのではないかと。別枠でまた補助があるものなのか。

■別の補助はない。補助金の額は要綱で決められており、現在は上限7,000万円となっている。

□今後、資格を取るための教育費用、燃料費や整備費が増えてしまった場合には、7,000万円が限度だから、また別で交渉しなければいけないということか。

■更新機であるとか大きなものがあれば、個別に相談となるけれども、毎年の補助額については、別に相談や要望はしていない。

□更新機のときは別に交渉というのは、これは会議上で決まるのか。

■会議の中では、更新の時期がくるといことは話をしているが、具体的な協議にはまだ至ってはいない。

□現時点で更新費用を出してもらえるかどうかはまだ怪しい状態で、時期になったら更新をしなければいけないということか。

■県としての動きはない。

□県内の応援協定に基づき、4機が動いているとのことだが、どのような協定なのかということと、機体を更新するときは、どういう会議で決定されたのかについて、予算のことも含めて、前回のことも構わないので教えて欲しい。

■特段、協定で取り決めはないけれども、横浜市と川崎市で、耐空検査の時期について連絡調整をしているので、横浜市と川崎市それぞれ1機ずついる体制にして、365日動いている状態である。万が一の時は、よく連絡をとり、点検時期をずらしている。これは県の要望ではない。また、次の更新時期に備え、機種選定等も考えて検討を行っている。予算についても、会議で決めたのではなく、県や国の方に該当するものはないかと別途相談に伺って対応をしてきたという経緯はある。

□連携協定というのは横浜市と川崎市の二つの市だけで、県と協定は結ばれてないのか。また、更新機は、消防防災ヘリコプターを製造して

	<p>いるメーカーから、機能に関するプレゼンを受ける機会はあるのか。</p> <p>■協定については、県内全ての消防本部による神奈川県下消防相互応援協定の仕組みでやっている。県が必ず1機いるようにしてくれということではない。</p> <p>更新機については、当然、必要であればメーカーに聞いたりするが、まず横浜市の人口であるとか、規模であるとか、そこに対してどんな能力が必要なのか、どんな機体が運用しているのか等、他都市の実態を聞いたり見たりとかで絞り込んでいる。</p> <p>□航空消防隊職員29名のうち、専門的技術の必要な操縦士や整備員等は、消防局に入ってから技術を覚えるのか。それとも、消防局に入る時点で、既に専門的技術を持って採用されるのか。</p> <p>■操縦士、整備士共に一定の経験を有した資格者を採用している。</p>
委員の所感	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県補助金として横浜市は令和3年度から 7,000 万円の補助を受けている。今後の増額要望については、消防防災ヘリコプターの運用経費の応分負担を継続要望（機体の維持管理経費、空港施設の維持管理経費）。千葉市も県に予算要望をすべきだ。 ・ 県からの維持管理経費補助へ至った経緯としては、継続的な市選出県議（県議会みなと会）への要望行為などがあったことは千葉市でも検討できるだろうか。千葉市と県での協議についてしっかり後押ししていきたい。 ・ 本市と千葉県との運用経費等について、参考になる説明だったが、千葉市の消防局では、十分このような資料は折り込んでの対応を進めていると思う。また、神奈川県と横浜市とは話し合いの立場もかなり違っていると思われるので、難しい所もあるのではないだろうか。 ・ 本市においても、千葉県との経費負担の問題がある。横浜市においても、神奈川県はヘリコプターを所有してなく、横浜市が 2 機、川崎市が 2 機所有し、地域の航空消防活動を実施している。 本市はランニングコストの負担がなく、イニシャルコストはあるが、横浜市は両方あるとのこと。本市も令和3年7月の千葉県と連携推進会議を行っており、県への負担要望額として1億 1,500 万円を試算しているが、この負担額が今回の視察を通して妥当性なのか、今後検討する必要を感じた。 ・ 横浜市も千葉市同様 2 機の消防防災ヘリコプターを整備されており、神奈川県はヘリコプターを持っていない千葉県と同じ状況であった。県からの維持管理経費補助については、協議を行う会議が設置されて話し合いが行われたとのこと。経費の約 30%を県負担でという考え方

	<p>は千葉にもあてはまることであり、千葉県との協議についても参考になると思う。</p> <ul style="list-style-type: none">・機体更新の財源については、その都度、国からの補助等協議を行って相談してきたとのこと。消防防災ヘリコプターについては、全国的な災害時にも運用が行われるため、一律で方向性を決めてもいいのではないかと考えた。・横浜市と川崎市、相模原市と連携しての要望活動とのことであり、千葉とは若干違う背景があると理解した。令和2年から3年までの3,000万円から7,000万円の増額については、国からのWパイロット制教育経費も要望し増額となっており、千葉市としても必要性を認識した。応分負担については、当然の主張であることも理解した。・横浜市も千葉市も同じく属する県にヘリコプターがなく、政令市が県のすべきことを補完している。その状況を打開するべく、平成26年に県・政令市間の連絡調整会議をもち、市選出の県議の会に要望書を出すなど、積極的に動いたことは見習うべきところがあると思った。千葉市としても市選出の県議グループに働きかけをするべきだと考える。・横浜市消防局、川崎市消防局にそれぞれ2機ずつのほか、神奈川県警察航空隊でも所有しており、整っていると感じた。また、県との共同運営（ヘリポート等）についても、うまく調整されていると思う。・経費補助については、単に負担を分割するというよりも、地域の防災活動などについて、県および3政令市での消防行政連絡会議で調整されており、今後についても継続協議を実施されるとのこと。それぞれ要望を示しながらの調整は、千葉においても県と市の調整について大変参考になった。
--	---

1 横浜市

(2) 高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施について

調査目的	<p>横浜市では、介護予防・健康づくり、社会参加、生活支援の一体的推進に向けて多様な事業を展開。</p> <p>独自の「医療・介護統合データベース」を構築して医療・介護データの接続分析や日常生活圏域ごとの分析を目指すほか、自主的な介護予防活動のグループ「元気づくりステーション」を市内300か所超に広げ、市民の自主性に基づく介護予防と社会参加への活動を、市・区の医療専門職等が支援する仕組みの構築について調査し、本市施策の参考とする。</p>
視察概要	<p>1 調査項目「高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施について」</p> <ul style="list-style-type: none">・よこはま地域包括ケア計画（第7期横浜市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画）の概要、高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施に関する計画への位置づけ及び計画達成状況について・元気づくりステーション事業の概要、効果及び課題、今後の取組について・YoMDB（医療・介護統合データベース）の概要、開発費用及び維持管理費、活用状況、効果及び課題、今後の取組について <p>2 説明者</p> <p>横浜市健康福祉局高齢健康福祉部地域包括ケア推進課長、同部高齢健康福祉課長、同課計画調整係長、医療局医療政策部医療政策課担当係長</p> <p>3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□職員が地域に出て地域活動の支援を行っているとのことだが、具体的に成功した事例があれば教えてほしい。</p> <p>■地域活動交流コーディネーターというのを市の独自財源で配置している。元々地域づくりが盛んだったのは、20年くらい前から地域福祉保健計画を策定していて、そういうツールをもとに、自治会・町内会単位で活動支援をしていた。あと、区役所、地域ケアプラザ、区の社会福祉協議会、この3者が中心になり、汗をかきながら、色々な地域活動支援や掘り起こしを行っている。</p> <p>成功事例としては、介護予防的な取組や健康づくり、災害時要援護者の取組、子供食堂等、沢山ある。</p>

- 外国人に対する介護人材確保というのは、他都市でもやっているが、やはり日本人の人材確保は難しいと思う。高齢者は外国人に見てもらいたくないとか色々あるので、日本人を介護業界に入れるような人材確保の施策はあるのか。
- ここは非常に頭が痛いところで、例えば、昨年度から入門的研修という介護の基礎的な知識を習得するイメージの研修を、オンラインでいつでも誰でもどこでもできるということで企画をした。昨年は216名の受講があり、その受講者層を見ると、働いている方や主婦層が結構参加されていて、新たな層への開拓の一つにはなった。また、若年者層へのアプローチという意味で言うと、来年度、小中学生の授業に、実際その介護に携わっている方々が行って出前講座的なものを実施したいと思っている。併せて、既に実施しているが、定時制高校とか、少し配慮が必要な高校生の方々を対象に、介護の実体験をしたり、資格取得を支援したりする取組もしている。地道ではあるが進めている。
- 介護人材について伺うが、1点目は地域ケアプラザの施設の役割の中での担い手確保をどのようにしているのかと、2点目は介護人材の負担軽減のために、千葉市でもICT介護ロボットを活用しているという流れになっているが、横浜市では今、どれぐらい移行が進んでいるのか。
- 1点目の地域ケアプラザは、地域の方々に対し介護人材というよりは、民生委員等、地域で色々活動をしている方も担い手不足なので、例えば、地域に出ていただけるような講座を企画して、それをきっかけに、自治会・町内会活動とか、地域活動につなげていくということを戦略的に実施していると思う。
- 2点目のICT介護ロボットは、県の基金等を活用しながら、大規模に導入を進めている。実は9月補正で独自に介護ロボットの予算を1億円計上している。効果や課題を認識し、できる限り多くのところで使ってもらえるよう推進していきたいと考えている。
- 地域のケアプラザは直営か。民間の方が入っているのであれば、どれぐらいの割合で行われているのか。
- また、介護人材については、どこでも大変な思いをしており、その中で特に海外に目を向けて人材確保の取組をしているという点は、非常に先進的な取組だと思うが、今どれぐらいの人数の方が確保されているのか。
- 地域ケアプラザは直営ではなく、基本的には指定管理制度で実施し

	<p>ている。</p> <p>海外からの介護人材については、横浜市が覚書を締結して幅広くやろうとしていたところにコロナが発生し、なかなか人材が入ってくれなかったという状況である。一方で、国内にいる外国人の方が介護の方で働いていただけるように、マッチングみたいのをして、一定数は確保しているが、総数としてはそんなに多くはない。</p> <p>□地域のケアプラザに係る指定管理者の予算は大体どれぐらいか。</p> <p>■施設によって状況が違うが、1施設当たり平均5,500万円ぐらいで運営している。</p> <p>□横浜市の医療データベース活用事業を始めるきっかけは何だったのか。トップダウンなのか、あるいは職員の方々からの声とか、そういうところを教えてほしい。</p> <p>■背景的には、社会の様子が変わり地域医療構想とか、病院機能が足りなくなるというような話題があり、そういったものを市役所ベースで見ようとするとデータが全然なかったの、何とかしないといけないという話がトップダウンであった。下の方で設計をするけれども、上の方からの応援とかが合わさってできたものである。</p>
<p>委員の所感</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者も元気なうちは、元気づくりステーションのグループ活動を広げるとともに、効果的な取組事例の報告機会を作る等、活動継続に向けてモチベーション向上を図っていくべき。 ・地域づくりを一番に据える横浜市の施策にとにかく感動した。千葉市でここまで追いつくには、相当の覚悟が無くては無理だと思う。 ・あんしんケアセンターを身近な福祉保健の総合窓口として設置することは千葉市ではまだ想像もつかないが、子どもと合わせ、地域で解決する仕組みづくりは今後必要と考える。 <p>市としてどこまでその地域づくりを本気でサポートするのか、戦略的に国がどうかでなく千葉市としてどうするのか、本気でやっても20年、今やり始めなくては到底かなえられないと思う。</p> <p>今日話を聞いていたら、何が必要なのか、見えたのではないか。地域づくりを本気で支援する千葉市の方向性を見出したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・千葉市においても、あんしんケアセンターを中学校区に1か所という話が出たことがあるが、横浜市は地域ケアプラザが中学校区を目安に1か所とのことで、大変身近な相談窓口であり、拠点であると感じた。また、施設貸出の役割として、情報収集、担い手の発掘を行っているとのことで、参考になった。

- ・介護の外国人活用については参考になったが、ICT介護ロボット等の活用については、千葉市の方が進んでいると感じた。
- ・元気づくりステーション事業は、大変良い取組と感じるが、課題にあるように、担い手の確保、育成がポイントになると思う。
- ・医療データ活用事業については、今後、各地域で在宅医療介護の需要が増加する中で、このようなシステムの必要性が増すと思う。参考になった。
- ・地域ケアプラザの取組は参考になった。活動が交流の場として利用できることは、重要と感じた。情報収集や担い手の発掘につながる取組であり、千葉市としても必要性を感じた。
- ・認知症では、もの忘れ検診については、受診勧奨拡充の取組については重要であり、千葉市としても必要性を感じた。
- ・元気づくりステーションでは、342か所の立ち上げとなっていることは、素晴らしい取組となっている。介護認定率は、参加している人は8割少ない結果となっており、効果も上がるため、本市としても支援拡大が必要と感じた。
- ・介護従事者の人材確保が最大の課題である。
- ・地域ケアプラザが中学校区に1か所、市内に143か所に整備され、その中に地域包括支援センターが設置されているとのこと。地域支援としての活動や交流の場の提供や、地域活動コーディネーターの配置の実施等が、横浜市の特徴とのこと。地域づくりが元気な高齢者づくりに通じているといった話は参考になった。
- ・介護人材確保に向けては、ベトナムの3都市、5大市等との覚書を締結した取組を進めているとのこと。オンラインで介護職のPRを行っている、元気づくりステーション事業を実施して10年経過している等、どの自治体にあっても、高齢社会の中で介護予防のための施策や介護人材の確保は同様の課題があり、いかに工夫して事業を展開していくかが問われていると改めて感じた。
- ・地域ケアプラザについて、地域の身近な福祉保健の相談窓口が欲しいという声は、私の知人の高齢者からも聞いており、千葉市にも導入を考えたい機関である。
単なる相談だけなら、千葉市にもあるが、その拠点で具体的な活動や交流が行われていることが、素晴らしいと思う。
- ・元気づくりステーションについて、知り合いの高齢者から、「高齢者同士の集まりをやりたいが、自分も年をとっているのでリーダーシップをとれない」という声を聞いている。その点、元気づくりステーショ

	<p>ンには、区役所が最初に直営するので、自主活動に移行しやすいことが、評価できる点だと思う。ただし、年月を経て参加者の高齢化で、自主活動が立ち行かなくなる時がきたらどうするのか、すでに課題も見えてきてしまっている気もする。</p> <ul style="list-style-type: none">・本市も横浜市も少子高齢化における介護に対する様々な問題点は共通していると感じた。横浜市の特徴として、地域の身近な福祉活動の拠点や、職員が地域に出て地域活動の支援を行っていること、介護人材の支援で、特に外国人の活用に向けた支援に力をいれている部分は勉強になった。人材確保としてオンラインで、いつでもどこでも介護職へのアプローチをし、小中学校にも出前講座をしていること、高校生への実際の介護体験をしていることは、参考になった。・元気づくりステーション事業の実績と成果の説明を受けて、非参加群 3.8%に対して、参加群 0.8%と 8 割少ない結果となっていることは驚いた。EBPM(証拠に基づく政策立案)の必要性を強く感じた。
--	--

2 岡山市

(1) おかやまケンコー大作戦について

<p>調査目的</p>	<p>岡山市では、ソーシャル・インパクト・ボンド（SIB）を活用した健康ポイント事業、おかやまケンコー大作戦を多くの企業と連携し、実施。国内のSIBでは過去最大規模といわれている事業を調査し、本市施策の参考とする。</p>
<p>視察概要</p>	<p>1 調査項目「おかやまケンコー大作戦について」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事業概要について ・ 事業実施の経緯について ・ 参加対象を35歳以上とした理由について ・ 成果目標と委託料の金額について ・ 続・おかやま健康大作戦の概要について ・ 事業実績、効果及び課題、今後の展開について <p>2 説明者</p> <p>岡山市保健福祉局保健福祉部保健管理課健康寿命延伸室長、同室主任</p>  <p>3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□平成26年から28年度に実施された第1次実証実験の時に会派で視察し千葉市に持ち帰ったが、協賛企業は1社しかいなかった。岡山市は地元企業の13社と連携しながら広く展開されているところが非常に興味深いと思う。事業運営会議等で色々企画しながら進めてきたことについて詳しく教えて欲しい。また、SIBという仕組みで難しくて大変というところを教えて欲しい。</p> <p>■どのように事業を展開していったかについては、13社の地元企業が</p>

入っている事業運営会議で、複数の事業者からの色々な意見を中間支援組織である事務局がとりまとめ、その13社が事業を行うために必要な資金を出し、それぞれが独自に事業をしながら、全体の事業も進めている。

SIBという仕組みについては非常に複雑で、経済産業省の方とやりとりして色々情報をいただいていた。単独でこの仕組みを作り上げて行くことは難しかった。課題は、出資を伴う事業のため、出資金を管理することは法律上規制があり行政ではできないことなので、資格を有する専門会社に委託して、色々な企業に出資していただいたという経緯がある。

□12,000人ぐらいの参加者に対して、どれぐらい年間にポイントが付与されるのか。

■予算規模としては年間3,000万円ぐらい。実績としては2,000万円前後である。

□時間的・経済的に余裕がない人で、かつ関心がない人等、参加しなかった人に対する取組も重要と考えるが、効果の検証はどのようにしているのか。

■まさに今検証をやっているところだが、この事業はいわゆるオペレーションアプローチが難しい。障害があったり、病気があったりする方に対しては、例えば、最近車椅子で色々なスポーツがあるので、次の事業では幅広くとらえて障害や病気があっても参加できるようにしたい。

□食生活や運動等、多項目にわたっているが、単に運動または食事だけなら参加する人は多いと思う。どこかの項目だけ参加するというのは駄目なのか。

■運動だけじゃなくて、バランス重視である。

□高齢者は骨密度やフレイル等の対策も大事だと思うが、この事業の中に入っているのか。

■フレイル予防については、高齢者の方が薬局に行ってチェックをしてもらったポイントがつくといった仕組みがある。

□第3世代の岡山芸術交流チケット特典は50代の応募が多かったとあるが、ほかに50代や高齢者の方たちを巻き込むための特典について何か考えているのか。

■こちらは今年度いっぱいの事業である。来年度以降については、高齢者向けとしては、フレイル予防、骨密度の測定等のイベントに参加していただいたら特典がつくようなことをやっていきたいと考えてい

	る。
委員の所感	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1社でなく地元企業 13社が出資することや、市民の個人参加だけでなく、企業単位で参加することで巻き込み力が強い施策となっていると考える。各社も主体者になることで積極的に関わられる。 ・ 千葉市のポイント付与の仕方では手間がかかりすぎて、もらう気になれない。岡山市のようにその場ですぐにポイント付与がされる仕組みが必要。 ・ 対象年齢を広げたり、ポイント付与メニューも様々検討したり芸術祭とコラボするなど健康に興味なかった層を取り組む工夫が良い。 ・ SIBは行政で取り組むことはハードルがあるが、協力者の支援で効果的な取組となったと考えるが、今後千葉市でも取り組める事業があるのではないかと。さらに研究していきたい。 ・ 千葉市にも同じようなポイント制度があるが、岡山市は参加企業も 13社と多く、どのように参加企業を募集しているのかということに興味があったが、おかやまケンコー大作戦事務局（受託者企業）が大きな役割をしていることがよく分かった。 国との連携で、このスキームを構築した、そしてファンドを行政が行うことが難しく、それを得意としている企業に協力してもらっているとのこと。やはり行政だけでなく、地元企業、国、様々な事業者が協力して行う必要性を強く感じた。 ・ 企業を巻き込んだ作戦はとても先進的であると感じた。高齢化してからでは遅いので、40歳以上としたのは良いと思った。ただ参加している方たちは、時間的な余裕や経済的余裕がある方だと思えるので、本当にこの作戦に参加してほしい層に届くのが少し心配である。 食生活の改善に関しては、家でバランスの良い食事を手作りしている人々にポイントが付かない。努力が報われる方法はないのかと思った。 ・ 地元企業が 13社参加して出資金 3,000万円を確保する等、SIBにおけるモデルは参考になった。 企業対抗バーチャルウォークラリー等、歩数増加に向けた独自の取組に 11,000人の参加者があることは、広がりを感じた。 5年間で約 3.5億円の総事業費で、医療抑制効果は 3.7億円。効果も重要であり、ウォークラリーの展開も 18歳から参加される方を増やす等、千葉市でもより積極的な取組が必要と感じた。 ・ 健康寿命の延伸のための企画として着目点等、基本的なものをクリアして参加者に有意義な結果がでているのか。若年層の参加にも力を入れているのは、民間参加での事業運営も素晴らしいが、なかなか参加

者の継続性が難しいところがある。ポイント制の特典も実施。食生活、運動、社会参加等の多項目をチェックする企画は難しいと思う。

- ・健康寿命の延伸、生活習慣病予防については、千葉市でも以前から取り組んでいると認識しているが、岡山市のケンコー大作戦、SIBを活用しての新たな官民連携、民間企業のノウハウ発揮、持続可能な社会課題解決への貢献等、行政・サービス提供者・出資者の連携は、大変参考になった。

また、生活習慣病のリスクが高くなるといわれる40歳を前にした、35歳以上の第3世代の健康ポイント事業についても、見習うべきところがあると感じた。

成果や事業効果についても、コロナの影響を受けながらも、増加傾向にあるので、今後の状況を聞いてみたいと思う。アプリで気軽にポイント集めも気になるところであった。

- ・ちばシティポイントを拡充していくための視点を学ぶことができた。千葉市としても、ウォーカブルや健康の取組も考えていきたい。障害や病気があっても参加できるものとしていくべきである。
- ・事業開始の平成27年頃に会派として同事業を視察したが、現在第3世代ということで、事業が継続されていることや全市を挙げて行政だけでなく企業や銀行等、それぞれの取組が実施され成果を上げられていることに驚いた。

コロナ禍でも、事業を継続していたこともすごいと感じた。千葉市でなかなかポイント事業が推進しないことが残念である。

2 岡山市

(2) 総合特区について（高齢者活躍推進事業）

調査目的	<p>岡山市では、高齢者が要介護状態になっても、いつまでも住み慣れた地域で生きがいを持って暮らしていけるように、介護事業所で社会参加活動や就労活動が可能となるような取組や啓発活動等を実施。</p> <p>令和3年度は2事業所が実践。将来的には、就労・社会参加に取り組む事業所を、市内に10か所程度創設することを目指す高齢者活躍推進事業について調査し、本市の施策の参考とする。</p>
視察概要	<p>1 調査項目「総合特区について（高齢者活躍推進事業）」</p> <ul style="list-style-type: none">・総合特区の一環として取組むこととした経緯について・高齢者活躍推進事業の概要について・就労・社会参加活動提供までの流れについて・具体的な就労及び活動場所、就労者等の声、報酬額について・事業実績、効果及び課題、今後の展開について <p>2 説明者</p> <p>岡山市保健福祉局保健福祉部医療政策推進課医療福祉戦略室長</p> <p>3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□事業所の方がかなり前向きにやってくれたということだが、それでもやはり苦労があったと思うので、何か苦労したことがあるのかと、社会参加することによって、認知症の症状が少し戻られるということをよく聞くけれども、そういった事例があれば伺いたい。</p> <p>■実際に一部の事業所では、前にフリーペーパーを配りたいという話があったけれども、システム上一部を切り抜いて配ることは難しかったという事例や、紙を配るエリアが余りにも小さすぎて、そこから取るのもいかがかということで駄目だったという事例もあった。すべての事業所がこの事業を理解しているわけではないので、話に行かないといけない。そこは苦労するところである。</p> <p>また、少し誤解されやすいところの話では、例えば、医者の方でも、どこまで高齢者を働かせるのかという意識で、高齢者はおとなしくじっとしているべきだという印象を持たれている。理解していただくには現場を見て実際に触れるのが一番である。</p> <p>なお、症状はやはりそう簡単にはよくはならないが、外に出たときの元気としたいいきとした姿というのは感じていて、一種の予防というよりは、症状をなるべく緩和するといった点で重要である。</p>

	今後多くの事例を見ていく中で調査し見極めたいと思っている。
委員の所感	<ul style="list-style-type: none"> ・説明の中で、20年後には「認知症高齢者数>小学生児童数」という表現があったが、とてもリアルに感じられる指標だと思う。実感をともなう数字を見せることが大事だと感じた。 ・健康寿命が伸びると、寿命も伸びるので、結局、健康でない状態、つまり、要介護状態で10年近く過ごすことになる事実がある。そこで、今後は益々、要介護の状態でどのように過ごせるのか。 ・認知症の高齢者がまちなかで「ハタラク」姿を見られるようになると安心して年を取れる、認知症になっても大丈夫と思える社会になる。 ・費用が特別かかることではないので、千葉市でもすぐに取り組める内容と思う。どれだけデイサービス事業者がやる気になれるサポートや情報提供ができるかにかかっており、まずはモデルを作って千葉市でも取り組んでいきたい。 ・デイサービスにおける「ハタラク」を全く知らなかった。今後の高齢者の自立・認知能力向上のためにも、大変素晴らしい事業と思った。 ・要介護の人が、つまらない思いでデイサービスに通っていることは、想像していた。与えられるだけでなく、少しでも社会の中でのやりがいを見つけて実践できる道をつけるのはとても素晴らしいことだと思う。 <p>地域から仕事を見つけて、マッチングする役割を最初は行政主導でも、事業所が積極的に仕事を見つけてくるという話を聞いたが、なかなか見つけられない事業所もあると思うので、コーディネート役がいるとよいのではないかと思った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者活躍推進事業では、通所介護事業所の介護保険サービスを通して就労を行うシステムで、コープやヤマト運輸等の事業所が草抜き、DM便配達等、認知症の方も働いている。事業所から謝礼の支払いがある等、社会参加を実感できることは、素晴らしいと感じた。 ・今回の視察の中でも気になる項目であった。高齢者の社会参加については、大きな課題であると捉えている。健康寿命の延伸とも連動しているとのことで、前向きな事業と感じる。 <p>活躍の場がない要介護高齢者の就労による自立の支援は必要であり、視点が素晴らしいと思う。本市に持ち帰り提案したいと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先進事例に学んだことは、市民（全世代）に高齢者活躍推進事業を伝えるための柱として、高齢になっても活躍する場を考えていきたい。 ・認知症高齢者は、存在するのが当たり前になる。人生最後の10年は健康でいられないと考えるべき。高齢者の就労は希望通りに行われて

	<p>いない。介護でも「就労による自立の支援」が必要ではないか。 お世話中心のサービスだけでなく、介護事業所に「ハタラク」を導入。 やりたいという気持ちを形にすることが大事。 事業所と共に行政が協力して対応できたこと、考えを共有することが 肝要とのこと。少なくとも謝礼があることがやりがいに繋がる。行政・ 福祉機関・介護事業所・地域・企業が協力する、その仕組みを作ること が大事であり、岡山市の先進的な取組を本市としても生かしていく ことができればいい。</p>
--	---

3 豊中市

(1) ひきこもり支援について

調査目的	<p>豊中市社会福祉協議会では、住民たちと連携して、ひきこもっている人たちとつながるための独自の仕組みを作っている。</p> <p>ひきこもり、困窮者など属性にとらわれることなく、様々な制度、事業を活用して、一人ひとりの適性や意欲に合わせたオーダーメイドの就労支援等について調査し、本市施策の参考にする。</p>
視察概要	<p>1 調査項目「ひきこもり支援について」</p> <ul style="list-style-type: none">・ひきこもり支援の事業概要について・豊中市社会福祉協議会CSW（コミュニティソーシャルワーカー）の活動内容について・生活困窮者自立支援の取組について・中高年のひきこもり支援を開始した経緯について・中高年のひきこもり支援対策の詳細、支援までの具体的な流れについて・関係機関等との連携状況について・ひきこもり対策の効果と課題、今後の展開について <p>2 説明者 豊中市社会福祉協議会事務局長</p>  <p>3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□豊中び～のび～のという居場所プログラムでは、どれぐらいの方を就労支援し改善が図られたのか。</p> <p>■今、登録している方が100人くらい。これまで95人ぐらいが仕事に就いている。入ってすぐ就労に繋がる人もいるが、ずっとここにいる</p>

人もいる。

び～のび～のでは、コロナの影響もあり参加人数を少し制限して、1日当たり10人くらいいる。元々の能力からして支援しなければいけないような人たちではないので、手取り足取りというより、むしろ本人の力を引き出せるということを大事にしている。居場所がなかった人は、逆にアルバイトやボランティアとか、人に求められることによって元気になる方がいっぱいいる。

□アウトリーチで50数回訪問に行くということはなかなかできることではない。その粘り強い体制はどうしているのか。

■全員に何十回と行くわけではなく、1回目でも駄目になることもある。このケースでは試されていると思って頑張った。誰かと一緒に行くようにして、行ける人を増やして対応している。

この訪問だけではなく町に仕事で回っているときに寄って名刺を入れて帰るということも含めてである。暇があつて54回行ったわけではなくて、時間を相当作っているけれども、変わるだろう、変わってほしい、変わるに違いないという気持ちでがんばっている。

□一人も取りこぼさないマンションサミット・マンション交流会について、具体的にどのような方法で行ったのか教えてほしい。

■マンションは、順番で理事長という役割が突然回ってくる。その年に、大規模修繕の担当になると、経験があれば業者に見積りを取ることができるけれども、経験がないと管理会社にまかせて金額が吊り上がり、管理費が上がっていつてしまう。理事長になった方は誰に相談したらいいのか分からず悩んでいた。10年ほど前に、社協に相談があり、マンションの問題を話し合う場所があつたらいいということで、マンションサミットという名前で理事長達に呼びかけて開催した。

ぜひ千葉市でもやってみたらいいと思うが、サミットで話し合ったことは何を悩んでいるのかで、入居者の受入、ルールの徹底、大規模修繕の方法、個人情報の開示等である。

例えば、どこにひとり暮らしの人がいるのかというのは、災害時の安否確認の時でも重要だけれども、全然把握できてない。個人台帳は誰が管理してどのように保管して共有するのか、その方法等を話し合う。それから防災訓練。サミットに参加すると、災害が起きたときに無事であることが分かるように自分の家の前に貼る無事ですシートというマグネットシートを配っている。それを使って防災訓練を、毎年1回実施してもらおう。何月何日に防災訓練やるからマグネットシートを出してくださいと回覧し、当日出てないところについて安否確認をする。

また、震度 4 以上でエレベーターが止まってしまった時の安否確認は誰がやるのかという課題に対し、一つのマンションが、中学生ボランティアをマンションで募集し災害が起きた時に、その子供たちに活躍しているという事例や、高齢の方のごみ出しをマンション内のシニアクラブみたい人たちが交代で助け合い活動している事例等、マンションの中でも色々できるということを共有している。サミットは年 2 回位ずっと開催している。

□コロナ禍で子供宅食を 95 世帯にアウトリーチで配食したというのは、ひきこもりを引っ張り出すためのツールとして使っているのか。支援後の状況はどうなっているのか。

■元々はコロナ禍で、子供食堂ができなかったことや、生活困窮世帯 1 万 6,000 世帯の中で食事をとれていない子供たちがいたので、そこを救いたいということから始まった。

弁当を届けますと言いながら、家庭訪問をしている。今は 100 世帯を週 1 回、CSW18 人が分担して届けている。

今まで子供の支援がなかなかうまくできていなかった。子供の支援というのは、児童相談所や子供家庭相談室がするけれども、ここは母親が結構ですって言ったらもう行けない。例えば、何か困っていることはないかと聞くと、子供が虫歯いっぱい、歯医者に連れて行きたいと言う。そして歯医者へ連れて行ったら、もうそれで終わりになってしまう。

学校との連携をしているが、例えば、経済的に苦しくて修学旅行の積立ができないという連絡が学校からあったら就学援助の手続きをしましょう、あるいは生活費が足りなかったら生活費の支援をしましょう、家が片付けられていなかったら片付けましょうといった支援をするけれども、それが終わったらもう次行く理由がなくなる。ずっとしんどい家庭が多いから見守っていく必要がある。

多分全国で最初となる見守り型のアウトリーチを初めて子供向けにした。今まで家に訪問する人は、監視的な人ばかりだったのが、見守りで弁当持っていくと母親たちに喜ばれて、そのついでに相談も聞いていく。弁当ばかりでなく食材も届ける。外国人の方もコロナ禍で沢山訪問した。手順が分からなかったらその場で書き方をすぐ教えてあげるとか、地道だけでも定期的に行くことで、相談ができるような関係ができる。

高齢者にはケアマネージャーがいるけれども、子供にはそういうポジションの人がいないので、大体しんどいご家庭が多いと思う。

	<p>□民生委員は対応しないのか。</p> <p>■これまで地域活動は民生委員がしていた。今、子供たちは私たちCSWがやっている。</p> <p>□2017年に会派で伺い、CSWのきめ細かい動きや社協のあり方等を千葉市に持ち帰った。今年CSWが区1人しかいなかったのが、やっと区に2人になった。豊中市社協の色々な取組を提案し、千葉市社協も改革に取り組んでいるが、まだまだ発展途上である。</p> <p>やはり本当にたった1人でも真面目に取り組む人が行政にいてくれると、こんなに変わるものだということを本当に実感している。千葉市でもぜひ育てたいと思う。5年経って、さらにパワーアップしている豊中市の活動に感服した。</p> <p>■千葉市はNPOが強くて社協が弱かったと聞いている。CSW1人でネットワークがゼロからだと本当に大変だと思う。</p> <p>□千葉市のCSWは地域のキーマンがいるから、なかなか自分達が前に出てやりにくいということがあるが、地域のキーマンとCSWがうまくやっていけるコツを教えて欲しい。</p> <p>■豊中市はすでに土壌ができていると思う。阪神淡路大震災をきっかけに、コミュニケーションができ、信頼関係ができたということがあったので未熟なCSWでも地域に行ったら育ててもらっている感じがする。頼ってもらえるとこちらもうれしくなってくるので、休日も行きますみたいな形でやっている。</p> <p>やはり断らないというか、困っていることは必ず対応するということを心掛けていると頼ってもらえるし、それに応えたいと思う。</p> <p>以前は豊中市に市民から、「そこにホームレスがいるから何とかしろ」という電話が来ていた。今は「ホームレスの人の話を聞いてあげて欲しい」と言うようになった。おそらく市民も変わったと思う。朝4時にいるとか、夕方6時以降しかいないと言われたら、その時間に行って本人の話を聞き生活再建する。そうすると、市民から「ホームレスがいなくなった。どうなったのか」という電話がきて、「連絡してくれたので、その人は生活できるようになった」と伝えたと、またそのような人がいたら探して連絡してくれるようになる。発見することと、解決することが両輪になってくるといい展開になる。やはりCSWは、困って連絡がきたときに、逃げてはいけない。</p>
委員の所感	<p>・千葉市でもCSWは各区2名体制となったが、豊中市で取り組んでいるような、地域づくりはまだまだこれからだと感じる。CSWが活動を進めやすいのは被災の経験が関係していると感じた。</p>

- ・最後に説明者である事務局長の勝部氏と立ち話している際に、TOPの意識が関係する千葉市で地域が熱心だが、社協が困りごとを解決するためにCSWが自由に動ける体制があるかどうか。豊中市でも以前はCSWがやろうとしても上司が止めに入るような状況だったとのこと。上司の理解を進めるか、地域から頼られるように動いてしまうか、熱意のあるCSWを地域で育てていかななくてはいけない。
- ・本人の特技や強い関心のあることを捉えて、役割を作っていくアイデアが素晴らしいと思った。
- ・び～のび～のでプチバイトをするのは良いと思う。ただ、そこに出かけさせるところまで持っていくのが難しいと思うが、どのように働きかけているのか知りたい。
- ・OB会があるのは良いと思う。
- ・引きこもりの予防として学校との連携が重要であるというのは、本当にそうだと思う。
- ・最後に「にげてはいかん」という言葉が印象に残った。
- ・豊中市の土地柄や事例を分かりやすく話していただき理解しやすかった。全国に先駆けてCSWを設置し、先進的、重層的な取組を行った例についても興味深く聞いた。
び～のび～のの運営・活動については大変参考になった。それぞれの事例とその対応・結果も分かりやすかった。
ひきこもっていた方が、それぞれのケースでそれぞれの方法で克服し、社会参加していく経緯は感動的であった。ひきこもりに至るには、様々な理由があることから、それを踏まえての対応が必要と感じた。
自尊感情を戻していくためのつながりや場所が必要であるというのは、まさにその通りだと思う。
- ・び～のび～ののパソコン、手作り、カフェ等、バイト料を支払って、ひきこもりの方が参加しやすい環境は参考になった。
家族会に案内、本人のやりたいことを聞き出す、できる活動を作り出し社会参加を促すアプローチは素晴らしい。
子供の不登校への宅食、教員との連携で早期発見、早期支援につながっている。見守り型のアウトリーチで喜ばれ、相談支援につなげていく取組は千葉市でも必要と感じた。
- ・ひきこもりの方へのコーディネーターをするという考えは勉強になった。人それぞれによって支援を変える、本人にとって必然性があり喜ばれるアウトリーチ、食材支援、宅食、手作りの栄養価の高いお弁当、学習支援等、参考になった。

	<p>社協でアルバイトしていたことを履歴書に記載し次の就職活動につなげる取組やマンションサミットの取組は大変参考になった。</p> <ul style="list-style-type: none">・2017年に会派で視察していたが、今回もさらさらと例示を説明できるぐらいに多くの経験値に圧倒された。中間的就労の場「豊中び～のび～のプロジェクト」は、本市でも考えていきたいと思う。・様々なひきこもりの事例を伺ったが、ひきこもっている人に対する個別の課題や特技をしっかりと把握して対応することの柔軟さやCSWの働きのすごさを学んだ。 <p>小学校区を中心に見守り活動を推進、学校と福祉の連携プログラムを開始する等、2017年に会派で同じ事業を視察したが、豊中市でもその事業がさらに拡充されていることを確認し感動した。</p>
--	---

4 京都府

(1) 京都自立就労サポートセンターについて

<p>調査目的</p>	<p>京都自立就労サポートセンターでは、経済的困窮や社会的孤立などの問題だけではなく複合的かつ多様な課題をもつ生活困窮の方に対し、パーソナル・サポーターが包括的・継続的に相談支援を行っている。</p> <p>利用者の方が安心して地域社会に参加し、生活できるよう寄り添い支援について調査し、本市施策の参考にする。</p>
<p>視察概要</p>	<p>1 調査項目「京都自立就労サポートセンターについて」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 京都自立就労サポートセンターの業務内容及び利用実績について ・ 実施事業について ・ 関係機関との連携について（市との連携の有無等） ・ 相談支援の流れについて ・ アウトリーチの取組について ・ 就労支援及び就労実績について ・ 中間的就労推進事業について ・ 運営目標及び今後の取組方針について ・ 施設見学 <p>2 説明者</p> <p>一般社団法人京都自立就労サポートセンター長、同センター主任就労支援相談員、京都府健康福祉部地域福祉推進課参事（生活困窮・自殺対策推進係長事務取扱）、京都府商工労働観光部雇用推進室参事（ダイバーシティ雇用推進担当）</p> <div data-bbox="438 1355 1353 1870" data-label="Image"> </div> <p>3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□中間的就労を受ける場を千葉市に作りたいと思っている。そういう企</p>

業はないかと相談を受けると生活自立・仕事相談センターに対象者の方と一緒にいたりするが、相談機関に繋がっても、受ける先がなかなか見当たらないという状態がずっと続いているので非常にどうしたらいいのかと思っていた。雇成型でお金をもらえるというのが中間的就労で、そのほかは就労体験というところを企業に説明に行かれて、きょうと生活・就労おうえん団に登録した企業が580社近くまで広がったそのノウハウを伺いたい。

■企業に訪問する際には、おうえん団の趣旨を説明した上で開拓している。障害者の方なのかとよく言われるけれども、そういうことではないとはっきりと伝えている。どんな人かと言われたときに、ひきこもりの方等、分かりやすく例示を出しながら説明している。

また、対象者は不安を抱えているので、多くのものを見聞きできるようなものを提供して欲しいと伝えている。就労体験の場合は、雇用を前提にせず、開拓している。

おうえん団の登録用紙に、企業が自発的にチェックする欄を設けており、体験だけ受け入れる、中間就労を受入れる、求人を出してくれるという項目を作り、自発的にチェックしてもらっている。私たちはチェックしてもらったものをデータベース化し、その中から体験だけをチェックした企業からアプローチをかけているが、企業にこの趣旨を理解してもらうのに少し苦労する。

このほか、求人を出している企業に当たったり、うまくいった企業から企業づてに紹介してもらうことも多くある。ハローワークに出すように、こちらにも求人を出す企業もいる。やはり継続してく中で広がっていくと思う。

□センターの運営体制について、相談員が何名かいるけれども、アウトリーチ担当は一人となっている。役割分担はどうなっているのか。

■相談員はどちらかというと兼務状態である。本当にすごく少ない人数でやっているなので、一人で色々なことを賄っている。中間的就労推進員といういわゆる企業開拓員や事務方以外は、アウトリーチ等、本当に多岐にわたり色々なことをしている。

□就職目標を達成した後の対象者に対してのフォローアップはどうしているのか。

■実際に会社まで行って働いている姿を見させてもらったり、なかなか会いにいけない時は、電話等で状況をしっかり確認する。働き始めは、大きな不安に包まれているので、最初の1か月間ぐらいは結構こまめに連絡する。それ以降は少しずつ期間を空けながら接している。

	<p>あとは、年に1回集まって、OB会やハイキング、バーベキューをしたりして繋がりを持っている。</p> <p>□センターに来る前の段階の仕事として、高校に行っているというのは伺ったが、ほかは特になのか。</p> <p>■ひきこもり支援団体と連携しており、ひきこもり相談にこられた人が働くことに目が向いてきたときに繋がっているほか京都府家庭支援総合センター、児童相談所等、色々な機関と連携している。</p> <p>□就職して頑張ろうと思ってもやはり、すごく疲れて休憩が必要になり、休職になる方は結構いるのではないかと思うが、実際のところずっと続けられているのか。</p> <p>■少し肌感覚みたいな話になるけれども働き始めて体調を崩して辞められるというのは、私の中では1割ぐらいだと思う。その手前のところでキャッチするので、無理やり働き始めるのではなくて、やはり自分の今の状態にあった働き方を本当に話し合ってからやっているのだから、こういったことが功を奏してか、あまりいない。それでも中には適応障害の方とかは、やはり急にプツンとなってしまうので、こればかりはどうしようもないけれども、でもその人たちも、また戻ってきて、また1からまた始めたらいい。こういう現場は、トライアンドエラーをきちんと保障し、失敗してもいいというのが前提である。</p> <p>□企業へのアクションのところ、中間的就労の事業者を見つけるのは大変だと伺っていたので、企業側に何かインセンティブや税金の優遇等のメリットがあるのか。</p> <p>■企業を騙しているわけではないけれども、私たちはものすごい金の卵のように差し出している。これからますます企業は人手不足で、人材確保に外国人まで手を出している。そう考えたとき、やはり日本の地域で暮らす人をどんどん雇用した方がいいに決まっているので、企業に深く説明までしなくても人材は宝物だから、それがメリットである。</p>
委員の所感	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実際に支援に入っている担当者からのレクはとても熱意を感じた。対象者の変化（リーマンショック後の失職者から若年層へ）や、中間就労の受け入れ事業者がNPOや社会福祉法人から一般企業へ拡充した経緯などよく理解できた。 ・ 一般企業への営業の際には「金の卵」として人材を売り込むとの言葉には、ひきこもっている方々に寄り添い、伴走支援をして丁寧に育てていることが表れていて素晴らしいと感じた。千葉市でも一般企業で受け入れを行えるよう事業拡充のサポートをしていきたい

	<p>い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ジョブパークは行政の縦割りを超え、様々な機能を兼ね備え、国・府で連携して長い時間をかけて作られてきたことが分かった。千葉では国・県・市とそれぞれが事業を進めているため、協働できる部分から連携を進める必要があるのではないか。 ・ 千葉市においても就職氷河期世代のサポートをしているため、自立就労サポートセンターの事業については、興味があった。担当の方がホームレス支援の経験があるとのこと、中高年の就労支援を行っていたが、その後の若者支援では、大変苦労されたお話は参考になった。自立就労のサポートのため、きょうと生活・就労おうえん団や一人にしない社会をつくる会等、様々な団体のネットワークは素晴らしいと思う。 支援のためのツールや就労準備支援のメニューから就労体験のソフトについても良い流れがあると感じた。 事業所の開拓、ステップアップ就労、定着支援は必要な取組であると思う。結果ではなくプロセスが評価される点は参考になった。 ・ きょうと生活・就労おうえん団は、登録働団体数の多さ、特に一般企業が多い。働いたことがない人がマイナスからゼロの感情にすることが一番大変という言葉に共感を覚えた。 ・ きょうと生活・就労おうえん団について、参画してくださる企業・NPO法人等の募集ノウハウに興味を持ち企業開拓している。1件1件の具体的なやりとりを確認したいと思う。 ・ 様々な取組を行っていることは、資料等で理解できたが、説明員の方の熱い思いが全面に出たの一方的な説明だったのが残念だった。就職定着率が高いことは評価できる。議員が質問したことで、課題や問題が明らかになった。 ・ きょうと生活・就労おうえん団で居場所づくり、中間就労、ステップアップ就労の場を提供する。登録団体数が、586 事業所、そのうち 449 か所が一般企業であり、広いネットワークづくりの取組は重要と感じた。 中間就労は有給雇用型にしぼった対応で、企業理解を得た取組。ジョブトレーニング、OJT等を行い、定着率 89%と、かなりの方が就職しているということは素晴らしいと感じた。 ・ 企業へのアプローチの方法を聞くことができてよかった。難しいと思いついていただけないということが分かった。これから千葉市の取組に必要な部分である。
--	--

	・伴走型で、金の卵として送り出すという姿勢が素晴らしいと感じた。定時制高校へのアプローチも大切だと感じた。
--	---